

発達障害児を対象とした集団療法的アプローチ評価質問項目作成の試み

人間科学部
臨床心理学科
教授
久保田 進也



研究シーズの紹介

本研究は、本学で実施している発達障害児対象のプログラムの効果を評価するための項目作成を試みたものである。本学臨床心理センターでは、これまで毎年夏休み期間中の4日間、発達障害を持つ児童生徒に対して集団療法的アプローチ（プレイケア「さんきゅう」）を行ってきた。

本研究では、プログラムの効果評価を量的な観点から捉え

ることができるようするために、学生・大学院生から報告された、プログラム実施による自身の変化について、自由記述で得られたデータを元に、KJ法に準じた形式で分類し、62枚のラベルを5つのグループにまとめ、それをもとにさらに質問項目を作成した。



本学独自の集団療法

- 5件法、15項目からなる質問項目が選出された。
- 自由記述に加え、量的に効果評価できることにつながる。

事前・事後学習での認識

（例）

- ・発達障害についての理解は？
- ・発達障害についての認識は？

実際の対応についての認識

（例）

- ・子どもへの自身の対応は
- ・自分に課せられた役割の理解は
- ・子ども同士の関わりへの対応は

自身の成長・気づき・課題についての認識

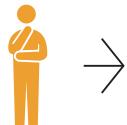
（例）

- ・自分自身に成長があったと感じる
- ・自身の対応の課題は

今後の課題：質問項目について、信頼性・妥当性の検討が求められる

期待される活用シーン

- 発達障害児を対象にした支援プログラムの効果を量的に把握したい

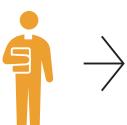


- ・プログラム実施主体であるスタッフ（大学院生・学生）への影響を質的・量的に検討できる



- ・次年度のプログラム参加者勧誘につながる

- プログラムが学生の成長にどうつながっているのかを明らかにしたい



- ・プログラム実施による自覚できる自身の成長



- ・学科独自のプログラムとして、入学を考えている受験生にアピールできる

他の研究テーマ

- ・メタ認知を活かした就活支援に関する研究
- ・視覚残像を用いたリラクセーション法についての研究